



「小児の発熱について」

A. 知っておきたい主な知識

1. 発熱は体内に発熱性の物質（内因性発熱物質）が産生されることにより起こります。感染症の時に、ウイルスや細菌などの病原体が体内に入ります。この病原体は外因性発熱物質と言われ、内因性の発熱物質を白血球に産生させます。この結果、発熱します。
2. 発熱は、脳の視床下部の中にある「体温調節中枢」が発熱物質に刺激されて体温が上昇する生理的反応です。
3. 発熱は体の免疫活動を高めます。この結果、ウイルスや細菌の増殖を抑えて、体の中にある病原体を排除します。つまり**発熱は、体を守るために大切な働きをする生理的にとても大切な反応と言えます。**
4. 解熱剤の使いすぎは免疫能を低下させ病気に対する抵抗力を無くします。また、薬剤による副作用（胃・肝腎障害・血圧低下）の心配もあります。
5. 高熱になっても、肺炎・脳障害などを起こすことはほとんどありません。安全性を最優先にして、むやみに強い解熱剤を使用することは止めましょう。
6. 一方で、体温の上昇により発熱児の酸素消費量・不感蒸泄などが上昇し、水分やカロリー必要量が増加します。イオン飲料や消化のよい食事を十分に与えてください。



B. 発熱時の一般的処置

- 1.まず安静にして、そっと寝かせてください。
- 2.室内を快適な温度に調節してください。
- 3.発汗を伴うので、タオルで体を拭いて下着を換えてください。
4. 30 ぐらいのぬるま湯でスポンジングして下さい：まず、タオルを浸し、腋の下や胸にかけてマッサージをするように拭いてください。すこし体温が下がり、気分が良くなります。

新生児・幼若乳児・40 以上の熱が続く時などの場合が有用です。

寒気が強く、気分が悪いような熱の上昇期には避けましょう。
冷水やアルコールによるスポンジングは止めましょう。

- 5.不快感・不眠・食欲不振などがあり、発熱による全身への悪影響があるような時には1日一回ぐらい解熱剤を使っても良いでしょう。
- 6.安全性と有効性から、小児の解熱剤としてアセトアミノフェンが主に使われます。アンヒバ坐薬（100mg/200mg）・カロナール顆粒などです。シロップ剤としてプランサスシロップもあります。

大川総合病院 小児科外来